「新しい東北」官民連携推進協議会
令[redacted]年度　第二回意[redacted]交換会

岩手県

9月18日

株式会社JTBコミュニケーションデザイン

アジェンダ

1. 学生との事前ワークショップの実施報告

2. 取材対象者について

3. 実践の場（フィールドワーク）実施概要

4. 3県合同セミナー

5. 「新しい東北」官民連携推進協議会の今後の体制について

● 1．学生との事前ワークショップの実施報告

（１）実施概要

〇ワークショップ実施日：8月4日、5日

〇参加メンバー

大学名	学部名・専攻	学年	出身地 （都道府県）
岩手大学	理工学部	2年生	大阪府
岩手大学	理工学部	1年生	岩手県
岩手大学	教育学部学校教育教員養成 課程特別支援教育コース	1年生	岩手県
岩手大学	理工学部システム創成工学科 社会基盤・環境コース	3年生	岩手県
岩手大学	農学部・森林科学科	2年生	青森県
岩手県立大学	総合政策学部	2年生	岩手県

〇主な議題

①取材チーム分け

②取材対象者の絞り込み

③取材テーマ、内容の検討

● 1．学生との事前ワークショップの実施報告【岩手県】

（2）主な意見

■ 震災の記録と伝承への意識

- 「震災の経験を風化させず、次世代に知見をつなぐことが重要」と認識。自身も取材対象地域として、行ったことがない地域（普代村・田野畑村）に興味。
- 地元とは異なるエリア（釜石）で活動することに意義を見出しており、被災地の多様な視点から学ぶ姿勢を示す。
- 「林野火災に関する現地の話を深掘りしたい」と語り、テーマに沿って個別の課題への関心を示す。
- 「地元を離れて戻ってきた方々の話に興味があり、宮古でそういった人々の声を聞きたい」と述べ、震災を経た人生の選択に関心。

■ 実践の場（フィールドワーク）の希望と取材方針

- 各学生が、自ら希望するエリアを選定（北部・中央・南部沿岸）し、これまでの知見や関心に基づいて主体的に地域を選んでいる。
- 「あの時の私に伝えたいこと」をテーマにした取材に対し、自分の所属するサークルの先輩など、身近な対象を取材したいという意見が多数。

■ 学生募集方法・広報戦略

- 「SNSのみの募集には限界がある」と述べ、大学サークルなどのリアルなネットワークを活用する必要性を強調。
- 「三陸委員会ここより」サークル内での連携や既存ネットワークの活用が効果的との共通認識。

● 1．学生との事前ワークショップの実施報告【岩手県】

■ 映像制作への意見

- 映像は「ダブル主人公方式（取材者と取材対象者の両方が画面に登場）」とする形式が提案され、学生たちはその趣旨を理解しつつも「緊張する取材環境への配慮が必要」との認識を共有。

■ リーダーシップと役割分担

- リーダーを選出、チーム内での調整役としての期待が示された。

（３）まとめ

- **震災経験の継承意欲：**震災当時に若者だった人々の声を取材し、教訓を次世代へ伝える意義を強く認識。
- **地域への関心と主体的な参加：**自身の経験や関心に基づき、取材エリア（宮古・釜石・大船渡など）を主体的に選択。
- **SNSだけでなくリアルなネットワーク重視：**学生募集について、サークルや大学内の人脈を活用した広報の必要性を指摘。
- **取材対象者への配慮と身近なつながり活用：**「語り部」に限定せず、先輩など身近な対象者への取材を希望する声が多い。
- **緊張への配慮と映像制作の工夫：**映像制作では「ダブル主人公」形式に理解を示しつつ、取材時の緊張感への配慮を重視。

● 2．取材対象者について

（１）取材対象者

推薦する人	年齢	性別	推薦理由
洋菓子店「パティスリーフィエルテ」オーナー	30代	女性	田野畑村出身。高校2年生の時に被災。関東でパティシエの修行後、田野畑村に戻り洋菓子店を開く。被災の経験を活かし、津波の語り部活動も行う傍ら、みちのく潮風トレイルで付近を歩くハイカーを対象とした民泊事業も開始している。
三陸ジオパーク推進協議会	20代	男性	宮古市出身。小学6年生の時に被災。震災を経験した一人としてできることを考えながら、三陸ジオパークの魅力発信、震災伝承を行っている。
NPO法人みやっこベース	29歳	女性	宮古市出身。中学3年生のときに被災。当時、多くのボランティアや支援団体に支えられたことへの思いが、今の活動の原動力となっている。震災後にやりたいことが何もなかった高校生の自分を変えてくれたきっかけが、みやっこベースとの出会いだった。仙台の大学へ進学しその後就職をしたが、宮古のために何かしたいという思いは消えず、2022年、夫とともに宮古へのUターンが実現する。みやっこベースは、子どもたちや若者が望む未来を自ら創れることを目指して、出会いや機会の提供を進めている。宮古市在住、1児の母。
NPO法人みやっこベース	30歳	女性	1994年生まれ。岩手県宮古市出身。山形県立米沢女子短期大学卒業。高校1年生で東日本大震災を経験し、まちの復興に携わりたいという想いが芽生える。短大卒業後、宮古市のコミュニティFM局に勤務。業務の一環でNPO法人みやっこベースに出会い、高校生のラジオ番組制作を行った。その後、県外への転居を経て2023年にUターンし、みやっこベースに入職。主な事業担当として「みやっこハウス」の運営等を行っている。
NPO法人みやっこベース	28歳	男性	1996年生まれ。岩手県宮古市田老出身。 高校進学を機に宮古を離れ、日本の色々な場所で学び、働き、2018年に宮古にUターン、宿泊業に従事。2023年10月に退社後、夫婦で1ヶ月半のヨーロッパ旅行へ。2024年11月には第一子が誕生。
岩手県農業共済組合	34歳	男性	1991年生まれ。宮古高校を卒業し青森大学社会学部入学。在学中に東日本大震災が発生し、父親が消防団員だったこともあり「消防団と地域」をテーマに研究。筑波大学大学院人文社会科学研究科で同研究を深め、修士号を取得。2016年にUターンし、岩手県農業共済組合に就職。同年、宮古市消防団第9分団に入団。2018年、震災ボランティア時代から縁のあったNPO法人みやっこベースの理事に就任。妻と2022年11月に誕生した息子と3人暮らし。
株式会社8kurasu	29歳	女性	岩手県釜石市出身・在住 2011年の東日本大震災発災当時は、甚大な津波被害を受けた鵜住居地区にある釜石東中学校の3年生。2021年3月31日をもちまして、株式会社かまいしDMCならびにいのちをつなぐ未来館を退職。
釜石東部漁業協同組合　両石湾隆丸	20代	男性	岩手県釜石市両石地区出身。震災当時は小学1年生でした。震災で家を流され、少しの間花巻市で生活。
大船渡市地域おこし協力隊	30代	男性	大船渡市出身。高校1年生の時に被災。様々な支援を受けながら高校で陸上競技を続け、大学時代には夢だった箱根駅伝に出場。実業団への所属等を経て、「地元を盛り上げたい」と令和7年にUターンし、地域おこし協力隊として活動している。デジタル技術を駆使した運動能力の向上やIT活用策の普及などに取り組み、令和7年6月には、市内で大規模林野火災の発生を受けて企画した、チャリティーランニングイベントを開催した。
陸前高田市役所商工交流部交流推進課	20代	女性	陸前高田市出身。小学4年生の時に被災。中学時代から、震災で犠牲となった父と同じ陸前高田市職員になることを目標としていた。 令和5年に念願の市職員となり、市民のために日々業務に励んでいる。 現在は、商工交流部交流推進課に所属し、移住・定住に関する支援や地域おこし協力隊のサポート等の業務に従事している。
(一社)陸前高田市観光物産協会	30代	男性	陸前高田市出身。震災後故郷を離れ、岩手県庁や大船渡市の企業に勤めたが、震災を乗り越え地元で頑張る人たちを近くで感じ、発信したいという思いから2019年に陸前高田にUターン。2020年から(一社)陸前高田市観光物産協会に務めている。

● 3．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（2）実施概要

● 実践の場（フィールドワーク）実施日程・体制

- **日程：** 2025年11月2日（日）
- **対象：** 岩手県内外の大学生
- **ルート：** 取材先・対象者の所在に応じて、以下の3つのルートに分かれて実施

①田野畑・宮古・大槌コース/ ② ・北上・釜石コース/ ③陸前高田・大船渡コース

主な内容

企画趣旨の再確認（出発前ブリーフィング）
- 実践の場（フィールドワーク）の目的や意義を改めて確認
- 安全管理、撮影・取材マナー、スケジュールの確認をチームごとに実施

震災遺構・復興施設の見学
- 各ルートで震災遺構（例：旧役場庁舎、防潮堤、津波伝承館 等）や復興のシンボルを訪問
- 被災当時の記録と照らし合わせながら、地域が歩んできた道を現場で学習

対象者インタビューの実施
- 震災当時に学生だった20～30代の地元住民・事業者・自治体職員等への取材
- 「あの時、何を思ったか」「今、どんな想いで地域にいるか」を掘り下げる
- 学生自身が取材の進行・質問・撮影・記録を担当（事前ワークショップで準備済み）

記録撮影（動画・写真）
- 映像は後日編集し、YouTube等での公開を想定
- インタビュー以外にも、現地の風景・街並み・人の表情・音などを積極的に記録

現地振り返りミーティング
- 学んだこと・感じたことを共有し、気づきの視点を深掘り
- 「自分たちの発信にどうつなげるか」を整理し、動画構成の構想を話し合う

● 3．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（3）想定コース

11月2日(日) 沿岸部を中心に巡るフィールドワーク3コース

チームA 岩手沿岸部を巡る 田野畑・宮古・大槌コース

9:00　JR盛岡駅 集合(各コースごと取材活動)

▼バス

■(宮古市)NPO法人みやっこベース
子どもたちや若者が望む未来を自ら創れることを目指して、出会いや機会の提供

▼バス

■(宮古市)三陸ジオパーク推進協議会
三陸ジオパークの魅力発信、震災伝承を活動

▼バス

■(田野畑村)洋菓子店「パティスリーフィエルテ」
津波の語り部活動や民泊事業を運営

▼バス

18:00 JR盛岡駅 解散

チームB 岩手沿岸部を巡る 花巻・北上・釜石コース

9:00　JR盛岡駅 集合(各コースごと取材活動)

▼バス

■(花巻市)岩手県農業共済組合
震災ボランティア時代から縁のあったNPO法人みやっこベースの理事として活動

▼バス

■(釜石市)株式会社8kurasu
中学3年の時に鵜住居地区にて津波を体験

▼バス

■(釜石市)釜石東部漁業協同組合 両石湾隆丸
震災で家が流され花巻で避難生活を体験

▼バス

18:00 JR盛岡駅 解散

チームC 岩手沿岸部を巡る 陸前高田・大船渡コース

9:00　JR盛岡駅 集合(各コースごと取材活動)

▼バス

■(陸前高田市)(一社)陸前高田市観光物産協会
震災を乗り越え地元で頑張る人たちを近くで感じ、発信したいという思いから陸前高田にUターン

▼バス

■(陸前高田市)陸前高田市役所 商工交流部交流推進課
地域おこし協力隊のサポート等の業務に従事

▼バス

■(大船渡市)大船渡市 地域おこし協力隊
地域おこし協力隊として活動

▼バス

18:00 JR盛岡駅 解散

※取材先については取材箇所、人数が都合により変更となる場合がございます。

実践の場(フィールドワーク)まとめの時間を盛岡で確保

● 3．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（４）チーム分け

Aチーム〈田野畑・宮古・大槌コース〉

大学名	学部名・専攻	学年	出身地（都道府県）
岩手大学	理工学部	1年生	宮城県
岩手大学	教育学部学校教育教員養成課程特別支援教育コース	1年生	宮城県
岩手大学	農学部・森林科学科	2年生	青森県

Bチーム〈花巻・北上・釜石コース〉

大学名	学部名・専攻	学年	出身地（都道府県）
岩手大学	理工学部	2年生	大阪府

Cチーム〈陸前高田・大船渡コース〉

大学名	学部名・専攻	学年	出身地（都道府県）
岩手大学	理工学部システム創成工学科社会基盤・環境コース	3年生	宮城県
岩手県立大学	総合政策学部	2年生	岩手県

● ３．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（５）取材内容について

基本構成
1グループ（6名）で「５分程度」のインタビューしてもらいます。
各チームそれぞれ独自のテーマ・視点・登場人物で切り口を設定します。

制作された3本の中から、特に優れた視点・表現力・共感性を備えた映像を各県1本を選出、石川県・金沢大学で開催予定の「能登復興×東北の若者」交流セミナー にて上映・発表を行います。

選定目的
金沢での上映・発表という「リアルな場」が提供され、他県・他大学の学生、地域関係者との対話と共感の機会を得られます。また自分たちの作品が、誰かの心を動かす力を持っていると実感できるはずです

選出のポイント（例）
・震災経験を普遍的な学びに昇華しているか・伝える力／構成・編集の工夫があるか・「他地域にも共有したい」と思わせる視点があるか等

公開予定
3本すべてが価値あるものです。全ての作品は、他会場（例：復興庁セミナー、ウェブ公開、SNS）で発信される予定です。
能登発表に選ばれるかどうかではなく、**全員が伝える責任者である**という意識でワークショップに取り組んでもらいます。

映像スタッフの同行体制について（進行については、進行管理1名と撮影スタッフ1名の計2名が同行）
各チームにカメラマンが同行します。事前準備としてマイクをつけて頂き、リハーサルを含めた打ち合わせを行ってから撮影となります。
視聴者にわかりやすく伝えるため以下の順番で撮影していきます。

1. **取材趣旨説明・自己紹介**
   インタビュアー自己紹介
   インタビュー趣旨説明
   取材の理由や学びたい事
2. **取材者対象者紹介**
   インタビュアーが紹介する
   もしくは、
   取材対象者が自己紹介
3. **質疑応答風景**
   インタビュアーと取材者
   対象者のやり取り風景
4. **まとめ**
   インタビューを終えての
   感想や学びについて

3．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（5）取材内容について

動画の全体構造

構成	内容
あの時のわたしに伝えたいことプロジェクト 2025	タイトル 取材撮影素材 コラージュ
プロジェクトリーダー趣旨説明インタビュー	岩手県の『新しい取り組み』の趣旨を代表者が説明
実践の場（フィールドワーク）Aチームコンテンツ	①：5分 ②：5分
実践の場（フィールドワーク）Bチームコンテンツ	実践の場（フィールドワーク） ①：5分 ②：5分 ③：5分
実践の場（フィールドワーク）Cチームコンテンツ	実践の場（フィールドワーク） ①：5分 ②：5分

総時間：約25分

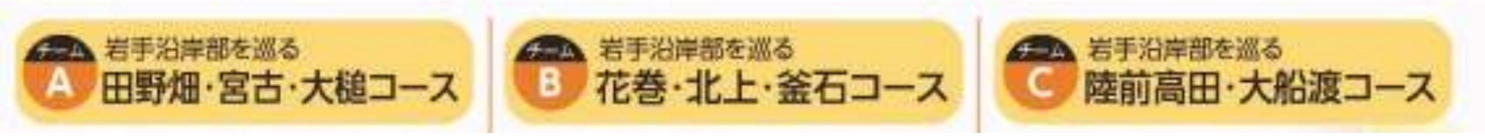
取材動画の構造（チーム別）

構成	内容
あの時のわたしに伝えたいことプロジェクト 2025 実践の場（フィールドワーク）	
プロジェクトリーダー趣旨説明インタビュー	インタビュアー自己紹介 インタビュー趣旨説明
取材者紹介	取材者紹介
インタビュー1 ｜ インタビュー3	質疑応答風景
まとめ	

総時間：約５分

● ３．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（５）取材内容について



取材対象　　　　　　　　　　　　　　場所　　　　　　日時

取材対象者1名につき、3問の質問。各チームは、共通・チームテーマから1つずつ質問を担当してください。

区分	質問内容(例)	インタビュー内容	自分の表現・工夫(メモ)	担当者(氏名)
テーマ1	震災当時の状況と心境を教えてください。			
テーマ1	復興の過程で、取り組んできたことはなにですか。			
テーマ1	支えてくれた人・出来事で印象に残っていることは？			
テーマ2	あなたにとって「復興」とは何ですか。			
テーマ2	復興の経験を通じて地域への考え方は変わりましたか。			
テーマ3	将来の宮城をどんな姿にしたいですか。			
テーマ3	「当時の自分」に今だから伝えたいことは？			
テーマ3	学生世代にどんなメッセージを伝えたいですか。			
その他				
その他				

● 3．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（６）実践の場（フィールドワーク）参加者に対する事前説明会について

◆実施日時

- 10月27日（月） 19:00～20:30

◆実施内容（主な構成）

① 事業趣旨と震災・復興の理解（リマインド）

- 「新しい東北」事業の目的と本年度テーマ「つながりのその先へ」の説明

② 取材チーム編成と役割分担

- 出身や学年を考慮したグループ分け（6人/チーム）
- 役割分担（リーダー・撮影・記録・進行など）の決定

③ 取材対象者の理解

- 担当する対象者の背景（職業・震災経験・現在の活動）を共有・調査

④ 取材テーマと質問項目の検討

- チームごとに「どんな話を聞くか」「どんな構成にするか」を検討
- 震災当時の記憶／現在の思い／次世代へのメッセージ等を軸に構成案を策定

◆成果として期待されること

- 取材活動に必要な基礎知識・姿勢を学生が習得
- 自らのチームで構想した取材と映像ストーリーをフィールドで実践できる準備完了

● 3．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（7）参加者募集について

■ 募集対象
- 大学生
- 被災地や地域創生に関心のある方
- 地域事業者や住民と交流し、取材・議論・発信に意欲のある方

■ 実施期間
- 2025年11月2日
- 実施前にオンラインでの事前学習（震災と復興の歩み等）

■ プログラム内容
- 実践の場（フィールドワーク）
- 地元住民や事業者へのインタビュー
- テーマ別ディスカッション

■ 募集期間
- 申込開始日：2025年8月19日（火）
- 締切日：2025年10月14日（火）

■ 募集人数
- 18名～20名

■ 募集方法
- 昨年度参加者への呼びかけ（事務局）
- 実行委員からの告知（実行委員）

■ 申込・お問い合わせ先
- 「新しい東北」官民連携推進協議会イベント事務局

● ３．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（８）実践の場（フィールドワーク）参加者について

ワークショップから参加の学生

★印は各チームリーダー

	大学名	学部名・専攻	学年	出身地 （都道府県）
	岩手大学	理工学部	2年生	大阪府
	岩手大学	理工学部	1年生	岩手県
	岩手大学	教育学部学校教育教員養成 課程特別支援教育コース	1年生	岩手県
★	岩手大学	理工学部システム創成工学科 社会基盤・環境コース	3年生	岩手県
	岩手大学	農学部・森林科学科	2年生	青森県
	岩手県立大学	総合政策学部	2年生	岩手県

※その他のリーダー選定中

● 3．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（８）実践の場（フィールドワーク）参加者について

実践の場（フィールドワーク）から参加の学生

No	大学名	学部名･専攻	学年	出身地（都道府県）
1	金沢大学	能登里山里海未来創造センター	研究員	東京都
2	岩手大学	理工学部	3年生	岩手県
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				
10				
11				
12				
13				
14				

● ３．実践の場（フィールドワーク）実施概要

（９）アウトプットについて

●ニュースリリースからの広報

・テレビ岩手、宮城テレビ、福島中央テレビ、※動画素材を提供

→報道への仕込み。

さらに県庁協力のもと、県政記者クラブへのリリース投げ込み、県内メディア取材対応を実施する。

● 4．3県合同セミナー

（１）実施概要

復興から14年、東北3県で培った官民連携の知見と、復興の途上にある能登地域の現状や課題を共有し、対話を通じて今後の地域間連携のあり方を共に考える機会とする。

つながりのその先へ～震災の教訓を共有し、復興の知恵を次世代へ～

- 日時：2025年12月20日・13：30～16：30
- 会場：　石川県地場産業振興センター
- 方式：現地参加（関係者）＋動画配信（※リアルタイム配信）
- 共催 ：各県関連団体、金沢大学様
- 連携先：能登官民復興支援センター
- 協力 ：副代表団体、実践の場に参加した高校生・大学生

■ プログラム構成

第1部－①：「官民連携推進協議会の取組について」

内容：岩手・宮城・福島各副代表団体（大学）による講演（各10分）

講演テーマ例：

「能登地域の復興の現状と課題」（金沢大学様予定）

「災後の地域に大学はいかに関わり得るか ― 陸前高田での実践を通して考える ―」（岩手）（岩手大学五味先生）

「エリアマネジメントと復興支援」（東北大学　姥浦先生）

「ふるさと愛をテーマに据えた取組について」（福島大学　藤室先生）

第1部 - ②：「能登×東北 対話の時間」

内容：能登側（大学、県庁、連復、銀行などの民間企業）と東北（第一部参加先生）によるトークセッション（30分）

テーマ例：「地域間連携のあり方」「復興初期段階の官民協働とは」

進行：後藤氏（ファシリテーター）

第2部－：「若者たちのメッセージ」

内容：3県「実践の場」で制作した映像の放映＋参加学生による感想発表・能登の参加学生（金沢大学・輪島高校など）からの発表（45分）

<交流セッション>

3県の参加学生（各地域2～3名※宮城県は多賀城高校）

金沢大学フィールドワーク参加者3名。輪島高校とのグループ対話（45分）

テーマ例：

・「私たちが地域のためにできること」

・「復興における若者の役割」

・「地域に住み続ける・戻る理由、離れる理由」

・「風化防止、SNS・映像を通じた復興の発信」

※参加する学生同士の交流として、「同じ現場に立つ体験」など、形式的な登壇に留まらない「共に過ごす時間」を設ける工夫を行う。

● 4．3県合同セミナー

（2）当日スケジュール

時間	プログラム内容
13:00	開場･受付開始
13:30	開会挨拶:「新しい東北」官民連携推進協議会 代表
13:40	第1部①:官民連携推進協議会の取組について 副代表大学(岩手･宮城･福島)による講演(各10分) 【講演テーマ例】 ･金沢大学:「能登地域の復興の現状と課題」 ･岩手大学:(五味先生)「災後の地域に大学はいかに関わり得るか ―陸前高田での実践を通して考える ―」 ･東北大学:(姥浦先生)「エリアマネジメントと復興支援」 ･福島大学:(藤室先生)「ふるさと愛をテーマに据えた取組について」
14:20	第1部②:能登×東北 対話の時間(30分) 金沢大学･東北3県･自治体･企業等によるトークセッション 【テーマ例】 ･地域間連携のあり方 ･復興初期段階の官民協働とは
14:50	休憩(10分)
15:00	第2部:若者たちのメッセージ(45分) (1)実践の場(フィールドワーク)映像上映(5分×3県) (2)学生発表(3県＋能登) (3)交流セッション(学生同士の対話) 【例】 ･私たちが地域のためにできること ･復興における若者の役割 ･地域に住み続ける／離れる理由
16:30	閉会挨拶:「新しい東北」官民連携推進協議会 関係者
16:30	終了

【会場案内(予定)】
･場所:石川県産業創出支援機構(ISICO)
石川県地場産業振興センター
第1研修室と同フロアの第7会議室

･所在地:〒920-8203
石川県金沢市鞍月2丁目1番地

･アクセス:金沢駅西口より
バス「工業試験場」下車 徒歩3分
タクシー約15分

● 「新しい東北」官民連携推進協議会の今後の体制について

【「新しい東北」官民連携推進協議会の見直しについて】

- ✓ 令和8年度から、「新しい東北」復興ノウハウ連携協議会へ名称変更。
- ✓ 現行の代表団体、副代表団体の枠組みはそのまま残す。
- ✓ 令和8年度からは、協議会運営を復興庁直営で行う。
- ✓ 「実践の場」等イベントは、福島県分のみ予算が認められている。
- ✓ 年1回程度、情報共有の場、福島県の取組の発表の場として、運営委員会を開催する。
- ✓ （令和7年度中）新しい東北HPは、復興庁HPに移行。

＜改正案＞
（目的）
第二条　協議会は、東日本大震災からの復興の加速化を図るとともに、復興を契機に、人口減少、高齢化、産業の空洞化等の地域の抱える課題を克服し、我が国や世界のモデルとなる創造と可能性の地としての「新しい東北」の<u>創造に向けたこれまでの取組を通じて蓄積されたノウハウを、地方創生の取組のモデルケースとして、被災地内外に普及展開するため、多様な主体が連携して情報の共有や交換を行うことを目的とする。</u>

【今後のスケジュール】

① 本日の意見交換会にて、名称変更のための要綱等改正案の提示

② 3月予定の運営委員会にて、決定